

○北海道羅臼町

羅臼町における地域創生としてのESDの視点

羅臼町教育委員会 自然環境教育主幹 金澤裕司

【これまでの経緯】「知床学」からの出発

羅臼町教育委員会では、2008年頃から「ESD」を教育活動の中に意識的に位置づけはじめていた。そして、それは知床の自然環境教育として整えられた「知床学」にもっとも強く反映されていった。「知床学」それ自体は2007年の中高一貫教育開始に向けて中高生の統合的な自然環境学習の名称として作られたものである。しかし、それは誕生して間もなくESDと出会ったことで、より幅広い意味を備えるようになった。

さらに2014年、町内すべての学校・幼稚園がユネスコスクールに加盟したことによって一貫教育を「中高」から「幼小中高一貫教育」へと拡大した。これにともない、知床学も幼稚園児から高校生まで貫かれた総合的な学習へと拡大した。

そして内容的にも自分たちの暮らす土地について学ぶだけに留まらず郷土の課題を意識し、それを解決するための思考や行動を重視する、ESDとしての色彩の強いものへと育ってきた。

【知床学の内容】「場」としての知床

私たちは「知床学は場の学びだ」と考えている。

「場」と表現する意図は、羅臼町だけに限らず半島の西半分の斜里町も含めた知床半島全体はもちろんのこと、知床半島が位置する北海道の東端全域や国後島・択捉島の北方領土も含めた地域全部を学習の対象と考える。また、先史時代は言うに及ばず、知床半島が形成された地質時代をも学習の対象とする。

そして、この学びを通して児童生徒が未来の知床の姿を思い描き、自分の生き方を通して知床あるいは羅臼との関わりを考えるようになるだろう。そうすると知床学はキャリア教育としての側面をも備えるのである。

つまり「知床学」で学ぶ対象は過去から未来までの時間と知床半島の位置する空間とに依っている。これが「場の学び」と称する理由である。

【知床学の拡張】羅臼の危機と「知床学」

羅臼町には深刻な課題がある。過疎化、漁獲量の低迷、経済の衰退、少子化などである。「知床学」を学ぶ子どもたちはこれらの課題に直面して学校の壁を軽々と越えて町に飛び出すようになった。

たとえば地元の食材を使って創作料理を考え出すプロジェクトがある。往時より減ったとは言え、まだ豊かな漁獲量と信じられないほど多様な魚種に恵まれた水産資源を用いて創作された料理は北海道内の高校生同士が競うコンテストで6回中4回のグランプリを受賞している。

これを支えるのは漁協や地元の飲食店、観光協会、そして教育委員会社会教育課の職員である。

また、2015年に札幌で開催された第4回国際野生動物管理学会議の高校生シンポジウムにおいて英語でのプレゼンテーションを行い、知床のヒグマとの共生という課題を世界に向けて発信した。

このように「知床学」の学びを進める中で、彼らのごく自然に自分たちの郷土を背負うという発想を身につけるようになってきている。

【知床学の狙い】新しい学びの創出

学校教育において「なぜ学ぶのか」という問いは、児童生徒の側からしばしば発せられる。その問いに対する答えは人によってまちまちで、対応する個個人の価値観や人生観によって規定されているだろう。思想、信条の自由は日本国憲法で保証されている基本的人権に属することであるからこれは当然である。

しかし、教科学習を進学のための手段としかみなさない学力観が無意味な受験競争を産み出し、学ぶ喜びや考える楽しさを伝えることを阻んでいる事実が一方にある。

剩え羅臼町のような僻地では、学力の伸長によって町から人材が失われる側面があると言われている。

経済学者の唐沢敬博士は、近代の日本は、資源、エネルギー、労働力そして有能な人材を地方から都市に集めることで発展してきたと指摘している。その結果として地方が疲弊していくのは当然の帰結だとしているのである。

子どもたちから学ぶ目的を問われたとき、われわれが自分を育てた郷土のためとも答えられる観点を明確にする必要がある。その価値観を形作るのが知床学なのである。そのためには知床学のESDとしての視点を指導者の間でも共有されなければならない。

【知床学の課題】「一丸となる」難しさ

知床学を推進するためには町内の様々なステークホルダーと学校との連携と協力が不可欠であるのは当然であるが、その際、学校と協力関係にあるステークホルダー同士が何を目的に子供に何を伝えるかを共有していることが非常に重要である。

簡単に言い換えれば、町の大人たちが子どもたちを育てる方向性を共有し一丸となって事に当たるべき、ということになるだろうか。羅臼町では、多様な機関が教育活動に協力してくれている。その構成は漁業協同組合、商工会、観光協会、知床財団の研究者や専門家集団など多種多様である。

しかし、多種多様であるからこそ地域社会全体で目標を共有することは難しい。知床学の課題の一つはここにあると考える。

【「知床学」の未来】町をつくる力を育てる場

知床学の今後は先述した課題をいかに解決していくかにかかっているとと言えるだろう。「知床学」が地域創生の原動力として機能するためには、町全体で「町をつくる力を育てる場」になることを目指してESDの視点を共有することが一つの鍵になると考える。